

## ベルクソンにおける「図式」と根源的統一性（3）

永野拓也

## 七、二つの記憶力

われわれは、ここから最後の諸検討に入りたい。つまり、等質空間を導入することと並んで、『試論』が持続を概念的に把握するための要因と見なした、自動的・反復的な自己が、『物質と記憶』においては、物質の只中で自由を確保しようとする人間の営みと、どのような形で関わっているかを探ることである。そのため、われわれは『物質と記憶』における記憶力へと目を向けねばならない。ただし、次のことを断っておきたい。『物質と記憶』第2、第3章に展開する記憶力の理論は、第1章における知覚の理論を、理論上の前提とし、かつ実証的に説明しようとしていると思われる。本来ならばわれわれは、この知覚理論を検討したうえで、記憶力の理論に目を移すべきである。しかし紙幅の都合上、目下は超越論的「図式」をベルクソンがいかに捉え直し、彼の見出した「自己」と如何に関係づけるかを検討の焦点に据え、知覚論そのものの検討は別の機会に委ねることとして、必要な場合に限り、知覚論を参照するに止めたい。

『物質と記憶』第2章において、ベルクソンは冒頭から記憶力に二つのタイプのあることを指摘する。一口に記憶力と言っても、純粋に心理的なものと、生理的機構に存するものと、二通りを考えることができるとベルクソンは見ているのである。心理的な記憶力とは、純粋記憶に対応する純粋記憶力であり、生理的機構に存する記憶力とは、身体の、まさしく「習慣」としての記憶力に他ならない。これらについての規定を、順に見てゆこう。

一方で、イメージ総体のなかで、身体というイメージが作用し、反作用を受け、再び周囲へと反作用するのであり、身体が行う作用＝活動は、その装置、特に神経系の複雑さに応じて多様になる、というのが『物質と記憶』第1章の展望である。この展望に立つと、「身体の反作用は、経験が身体を構成する物質のうちに設けた装置の数と本性により、多少なりとも複雑で、多少なりとも変化するものである。したがって身体が過去の活動を蓄積するのは、運動装置 (dispositifs moteurs) として、かつ運動装置としてのみである」(223-224/81-82) ということになる。

このタイプの、「過去の活動」の記憶について、「実践的な、それゆえにまた通常の、記憶力の働き、現在の活動のための過去の経験の利用、つまりは再認 (reconnaissance)」(224/82) はどのように行われるか。それは次のようにしてである。すなわち、運動装置に蓄積された過去は、「行動そのものの中で、状況に適したメカニズムの自動的な発動によって」(Ibid.) 再認されるのである。運動機構に存する記憶は、「暗誦課題 (leçon) の記憶」を例として説明される。

私は暗誦課題を学んでいて、これを暗記するために、まずはそれぞれの詩句を、分析によって韻律を際立たせて朗誦する。私は暗誦を数度繰り返す。新たに読み上げる度

に、進展が果たされる。言葉は一層よく結びつくようになる。言葉はついには、総体として有機的に組織される。まさにこの瞬間に、私は課題を暗記したのである。課題は記憶となり、私の記憶力に刻印されたといは言う (225/83)。

このプロセスは、既にわれわれが心理学講義第10講に見た、特に能動的な習慣獲得のプロセスと重なる。つまり、反復と分解、再構成である。実際、次のような『物質と記憶』の暗誦課題についての記述は、反復、および分解と再構成を強調する点で、心理学講義第10講における習慣獲得についての記述と酷似する。

暗誦課題の記憶は、暗記される限りでは、習慣のあらゆる性格を示す。習慣のように、課題の記憶は、同じ努力の反復 (la répétition d'un même effort) によって身につく。習慣のように、課題の記憶は、まずは全体の活動 (l'action totale) の分解 (décomposition) を、次いで再構成 (recomposition) を要請した。最後に、身体のあらゆる習慣的な訓練と同様、課題の記憶は、最初の衝撃がその全てを揺り動かすひとつの運動メカニズムの内に、つまり同じ順序で継起し、同じ時間を占める自動的な諸運動の閉じた体系の内に蓄えられる (225/84)。

この記述において、注目すべきは、習慣は分解と再構成を要する、という点であろう。反復すれば活動が身につく、というのは誰しも認めるところであろうが、全く同じことの繰り返してしかないことは、果たして身体に一つの「傾向」を刻むであろうか。講義は「徐々に訓練する」と述べ、『物質と記憶』は分解し、再構成することを、習慣獲得の進展とみなすのである。

さて、『物質と記憶』第2章は、「習慣のあらゆる性格を示す」記憶が、習慣と同じ仕方  
で獲得されるの並行して、もう一つの記憶が獲得されるとする。このタイプの記憶については、暗誦課題が暗記される過程を思い浮かべようとする場面を例に説明される。

継起して行われた朗読のそれぞれは、それ自身の個性性を伴って (avec son individualité propre)、私に思い出される。つまり私は、朗読に伴う様々の状況とともに、朗読を再び見るのである。一つの朗読は、それに先立つものや、それに続くものと、この朗読が時間のうちに占める位置によって区別されるのである。要するに、継起した朗読のそれぞれは、私の歴史の特定の出来事として、私の前に再びやってくるのである (225/83-84)。

この記憶と、習慣としての記憶を、ベルクソンは峻別する。暗記された暗誦課題は習慣の性格を示す。「逆に、しかじかの特定の朗読の記憶、例えば二度目の朗読とか、三度目の朗読とかいったものは、習慣の性格を全く備えていない」(226/84)。習慣としての記憶は、反復によって獲得された。それに対して、特定の朗読の記憶は反復されえないと言われる。

特定の朗読の記憶にあって、イメージは必然的に、一回で記憶力へ刻印されるのであ

り、というのも、他の朗読は、定義そのものからして、別の記憶を構成するからである。特定の朗読の記憶は、私の人生の一つの出来事なのである。つまり、こうした記憶は、その本質からして一つの日付を持ち、それゆえ反復されることがありえないのである。後の何度かの朗読がそこへ付け加えるであろうものは、この朗読の最初の本質を変質させるばかりである（Ibid.）。

ここに指摘される、「必然的に一回限りである」ということ、「反復されることがありえない」ということ、反復する積りで、同じもの、と見えるものを付け加えるだけで、「最初の本質が変質する」ということ、このことは、『試論』においては、質的あるいは精神的総合、潜勢的なものとしての持続を特徴づけることであった。質的综合としての持続においては部分的と見える変化が全体に反映してしまうのである。「旋律の一つの音を度はずれて強調して調子を乱すようなことがあると、その誤りを告げ知らせるのは、長さたる限りのその過剰な長さではなく、そのことによって小楽節全体にもたらされた質的变化である」（68/75）。『試論』においては、質的综合としての持続のこうした性格に基づいて、記憶における反復は事実上不可能である、ということ、一つの事例によって説明する。

毎日私は同じ家々を眺め、それに、それらが同じもののだとも知っているの、私はそれを恒常的に同じ名前と呼び、またそれらがいつも同じ仕方であらわれているとも思い込んでいる。しかしながら、十分長い時が経ってから、最初の何年かを感じた印象へと立ち戻れば、かつての印象の中に生じてしまった、独特な（singulier）、説明のしようがなく（inexplicable）、とりわけ言葉にあらわしようもない（inexprimable）変化に驚くのである（86/96）。

『物質と記憶』においても、「私の人生」にとっての出来事の個性は、上に見たような質的な有機化に存するということが理解できるであろう。とすれば、持続における有機的かつ質的综合という側面は、『物質と記憶』第2章における習慣的ならざる記憶、「独立的記憶（souvenirs indépendants）」（224/82）と呼ばれる記憶に継承されていると見て、恐らく間違いはない。

このことは、再び習慣としての記憶との対比によって説明される。例えば、暗記された暗誦課題が記憶であるのは、「他の全てのイメージの重ね合わせから結果する複合的イメージ」（226/84）としてではないとベルクソンは述べる。ここまでに『物質と記憶』は、独立的な記憶を、同一と見える要素の反復による全体の変質によって、さらに言えば、おそらくこの変質を支えるであろう、内的な有機化、それゆえの、そこに含まれる出来事の完全な個性によって規定し、また習慣的な記憶を、反復、および分解と再構成による習得によって規定して、これらの相反する特徴によって二つの記憶を区別してきたが、習慣的な記憶のもう一つの特徴、つまり「習得された暗誦課題の記憶は、私がこの暗誦課題を内心くりかえすだけでも、はっきり特定された時間を要する」（226/85）という特徴が、二つの記憶を区別する上で役立つことになる。

『物質と記憶』第1章にもとづいて、ここでは次のように言われる。すなわち、「私の現在、不可分の全体を形作るのだから、この運動はこの感覚に連なり、この感覚を活

動へと引き伸ばす」(280-281/153) のであり、「私の現在は、われわれの存在の物質性そのもの、つまり感覚と運動の総体であり、それ以外のなにもものでもない」(281/154) のだとすれば、また「身体が過去の活動を蓄積するのは運動装置として、かつ運動装置としてのみである」(223-224/81-82) のだとすれば、習慣的な記憶の行使に一定の時間がかかるのは、それが身体活動であるからに他ならない。ところで、生得的な身体活動と、習得された身体活動は、それが行使される場面を単独で見れば、単なる身体活動にすぎない。両者を区別するのは、後者が習得されたということに他ならないのだが、ベルクソンは習慣的記憶の行使それ自体に、これを生得的な身体活動の行使と区別するための、何らの兆表も見出さないのである。「暗記された暗誦課題を、私は生得的である (innée) と思い込むかもしれない」(227/85)。つまり、暗誦課題の記憶は、「他の全てのイメージの重ね合わせから結果する複合的イメージ」ではなく、「運動装置として、かつ運動装置としてのみ」、記憶であるとベルクソンは見る。

それゆえ、「他の全てのイメージの重ね合わせから結果する複合的イメージ」は、習慣的記憶そのものとは別のところに見出される。つまり、暗記された暗誦課題について、それが生得的な身体活動ではなく、習得された身体活動であると告げるのは、例えば「私が〔暗誦課題の記憶を行使すると〕同時に、暗誦課題を私が身につけるのに役立つ諸々の朗読の記憶を、朗読の数だけある表象として、呼び起こすことを楽しみとする」(Ibid.) ということなのである。以上により、習慣的記憶、つまり、分解と再構成の結果としてある記憶を、「複合的イメージ」であるとして、有機的な総合である独立的記憶と同一視しようとすることはできないことになる。

両者の間には、『試論』の数論が述べた、主観的なものと客観的なもの、つまりは潜勢的なものと現勢的なものの区別を見出すことができるであろう。既に見たように、『試論』は、「全面的に、十全に認識されるように思われるものを、主観的と呼ぶ」(57/62) とし、他方、「常に増加する多数の新たな印象が、われわれがそのものについて抱いていた観念と置き換えられることが可能である、といった仕方でも認識されるものを、われわれは客観的と呼ぶ」(Ibid.) としていた。『物質と記憶』では、独立的記憶が『試論』の意味で「主観的」なのであり、これは、それ自体としては分解も再構成も許さない。また、習慣的記憶は『試論』の意味で「客観的」であり、習慣的記憶のこの「客観的」性格は、そもそも、「身体の反作用は、経験が身体を構成する物質のうちに設けた装置の数と本性により、多少なりとも複雑で、多少なりとも変化するものである」(223/81) という、習慣的記憶の定義を構成する観察のうちに含まれているのである。言い換えると、『物質と記憶』に述べられる習慣的記憶の、言わば可塑的なものとしての特徴づけは、身体の活動そのものが許す分解と再構成に存するのであり、客観的、現勢的な可塑性である。また、客観的かつ現勢的な可塑性を持つからこそ、習慣的記憶は、現勢的なものとしての「一定の時間」を要するのだとも言えるであろう。

他方、「特定の朗読の記憶」は、一定の時間を要する暗誦課題の記憶と比べると、特徴の上で際立った差異を示すとされる。

特定の朗読の記憶は、表象であり、また表象でしかない。この記憶は、精神の一つの直観 (intuition) の内に与えられ、この直観について、私は好きなように、伸ばしたり

縮めたりできる。私はこの記憶に、任意の持続 (durée) が備わるということにするのである。私がこの記憶を一挙に、一枚の絵の中にあるように、包括的に捉えることを妨げるものは何もない (226/85)。

つまり、それを一瞬のうちに凝縮させようと、過去において発生したときのままに、同じ持続としてそれを生きようと、独立的記憶は同じ一つの記憶なのである。

## 八、「図式」と再認する自己

記憶力についての、以上の区別にもとづき、注意力による再認が説明されることになる。ベルクソンは『物質と記憶』第2章において、リサウエルの観察に基づく一つの臨床例を挙げる。これは、アルファベットの文字を視覚的に再認できず、文字を書こうとすると、あたかも文字をモデルとしてスケッチするように、手本を見ては文字を描く、ということを経繰り返すにもかかわらず、聞き書きや自発的な書記は可能だ、という例である。この症例について、ベルクソンは次のような所見を述べる。「ここで消滅しているのは、したがって、認知される対象の諸分節 (articulations) を見分ける習慣 (l'habitude)、つまり、図式 (schème) を描こうとする傾向 (tendance) によって、視覚的な知覚を補完する習慣である」(243/106-107)。こうした運動への「傾向」はなぜ「習慣」とよばれるか。それは、習慣一般が獲得され、一つの運動メカニズムが完成していることを告げるのは、この運動傾向についての意識だからである。

われわれの神経系は、明らかに、中枢を介して感性的な刺激へと結びつく、様々な運動機構 (appareils moteurs) を構築するように配置されており、神経要素の不連続は、また、おそらくさまざまに連関しうるであろう神経要素の分岐の多数性は、印象とそれに対応する運動との接合を、数限りないものとしている。しかし、構築の途上にあるメカニズムは、意識に対して、構築済みのメカニズムと同じ形では現れることはできまい。何かが、有機体のうちで堅固になった運動の諸体系を、深く区別し、明晰に表明するのである。それは、特に、諸運動の順序を変様させることの困難であると思われる (240/102)。

ベルクソンは、運動の順序を変えることの困難についてのこの意識を、音楽の演奏に際して、あたかも旋律として奏でられるのを待機するかのよう、音符同士がもたれ合うこととなぞらえる (Ibid.)。

また、先ほどの引用において、この運動傾向は、「図式」を描こうとする傾向、とも呼ばれている。この意味での「図式」という知見は、より限定されて「運動的図式 (schème moteur)」(255/121) と呼ばれ、当の習慣の、獲得過程を事例として説明される。例えば語音の聴覚印象を再認する場合である。「聞き取った章句の音節を分析し (scander)、主たる分節を際立たせることのできる、生まれかけの運動を、聴覚印象は有機的に組織立て」(Ibid.) るのであるが、この運動は、「反復されるにつれて (en se répétant) 次第にはっきりした姿をとる (se dégager) であろう」(Ibid.)。この、次第にはっきりした姿をとりつつ、

最後に「単純化された形態 (figure simplifiée)」(Ibid.) へと行きつく「生まれかけの運動」が「運動的図式」と呼ばれるのである。

さらに、運動傾向を担う習慣は、『物質と記憶』第1章における「感官の教育」に関わる。『物質と記憶』第1章では、感覚には延長があると認めるにあたり、「私のさまざまな感官の与える、同一対象の様々な知覚が、統一されても、対象の完全なイメージを再構成することはないであろう」(197/48)とされている。これらの感官によって「物質的対象の全体を近似的に再構成すること」(Ibid.)は、単なる統一ではなく、「感官の教育」(Ibid.)に委ねられるのである。いま、『物質と記憶』の第2章は次のように述べる。「感官の教育は、まさに、感覚印象と、それをを用いる運動との間に設けられる、連結のうちに全ての本質を持つ」(240/102)。というのは、感官のそれぞれが知覚であり、また知覚は、すでに一定の身体運動と結びついており、感官同士を統一するには、それを支える運動を組織化する必要があると、『物質と記憶』は見るのである。とすれば、この運動傾向、あるいは習慣は、感官の教育による物質的世界の近似的「再構成」、言い換えると、次第に「明晰になる知覚」を、支えるものであるとも言えるであろう。

こうした、知覚に随伴する運動傾向の存在に基づき、ベルクソンは次のように述べる。「全ての普通の知覚には、有機的に組織された随伴運動が伴うとすれば、通常の再認の感情は、この有機化の内にその根を持つことになる」(240/102)。要するに、記憶を喚起するための契機となるのは、知覚と連動する一つの身体的態度、より精確には、運動傾向あるいは習慣であり、とりわけ、この習慣の発動を、「単純化された型」として示す、「運動的図式」だということになるのである。習慣的記憶と、これとは独立した純粋記憶とを対比しつつ、ベルクソンは「この〔一回ごとの〕朗読のイメージを喚起する私の努力は、私がこの努力をより多く反復するにつれて、それだけ容易になる」(226/85)と述べる。その理由を、以上が示すとわれわれは考える。つまり努力が反復されるにつれて、ひとつの習慣が徐々に獲得され、それだけ「運動的図式」がはっきりしてくるのであり、「運動的図式」が明瞭になればなるほど、それだけ記憶の喚起は容易になる、ということであろう。

では、純粋記憶はどのようにして、身体的態度によって呼び出されるのか。「実際、外界の知覚が、われわれの側に、さまざまな大枠の輪郭を描くところの運動を惹き起こすとすれば、われわれの記憶力は、受け取った知覚と類似し、われわれの運動がすでにその下書きを粗描してあるところの古いイメージを、この知覚へと差し向ける」(247/110-111)。こうして記憶力は、『物質と記憶』第1章が考察した純粋知覚を、記憶イメージによって「二重化する (doubler)」(247/111) ことにより、「判明な知覚」(perception distincte) (248/112) を「創造する (créer)」(247/111) のだと言われる。つまり、判明な知覚とは、再認された知覚のことである。また、純粋知覚としての知覚を再認し、次第に判明にする記憶力の働きは、「果てしなく続きうる」(Ibid.) とされる。というのは、純粋記憶は原則的に、無限に伸縮自在だからである。

さて、注意力が知覚を記憶によって判明にするという意味で、『物質と記憶』は次のように述べている。「注意力は分析の努力であると言われたが、これは正しい」(247/111)。分析されるものは何であろうか。『物質と記憶』は、分析に先立って総合があるのだとする。「本当はこの分析は、一連の総合の試みを通じて、あるいは、同じことだが、同数の仮説を通じてなされるのである」(Ibid.)。つまり、「われわれの記憶力は、様々な類似した

イメージを選んでは、これを新しい知覚へと差し向ける」(248/112) ののであるが、このイメージの選択に、「総合」ないし「仮説」が関わるというのである。

この総合、ないし仮説とは、「知覚を続行させ、知覚と〔記憶〕イメージとの共通の枠として役立つ、あの模倣の運動」(248/112) であると言われる。模倣の運動とは、習慣獲得につれて明瞭になる「運動的図式」なのである。以上に見たような、知覚から運動的図式を介して記憶が呼び出され、運動的図式を経て記憶が選抜され、知覚が判明になる、という過程は、先ほどは「無限に続く」と言われたのであるが、このことは、「反省的知覚はひとつの回路である」(249/114) と表現される。つまり、運動的図式から純粹記憶へと繋がる経路は、純粹記憶の収縮の度合いがあるだけ存在する、往復の運動だということである。

ところで、なぜ、ある身体の状態が、身体とは独立なはずの純粹記憶を呼び寄せるのか。このことは、『物質と記憶』第3章に、次のように説明される。

しかしわれわれが、直接的過去以外に決して知覚することはなく、われわれの現在の意識はすでに記憶力であるとすれば、はじめに分けておいた二項〔身体の習慣に存する記憶力と、個別的な出来事を順序どおり、生ずる先から保存する純粹記憶に存する記憶力：筆者補足〕は、密接に結びついて一体になってゆく。この観点からすれば、実際、われわれの身体は、われわれの表象において、不変なままで再生する部分、常に現存している部分、あるいはむしろ、あらゆる瞬間に過ぎ去ったばかりの部分である (292/163)。

このことを踏まえて、ベルクソンは「習慣によって組織された感覚＝運動系の総体から構成される身体の記憶力は、従ってほとんど瞬間的な記憶力なのであるが、この瞬間的記憶力にとっては、真の記憶力が基底の役割を果たすのである」(293/169) と述べる。習慣としての記憶力は、「経験の動く平面」(Ibid.)、つまり「私に作用する事物と、私が作用を及ぼす事物」(Ibid.) からなる「数多くのイメージ」(Ibid.) としての物質世界へと「差し込まれる (insérée)」(Ibid.) ところの「動く尖端 (la pointe mobile)」(Ibid.) であり、それが何の尖端であるかといえば、基底をなす純粹記憶にとっての尖端であると言われるのである。このことを踏まえれば、J. トーにならって、次のように考えてもよいであろう。すなわち、『物質と記憶』にとって、イメージというものは、身体と知覚にあっては空間的なものと繋がり、空間と同様に不動であるのだが、純粹記憶においては持続のうちに流れ込み、持続と同様に動的になるのであり、この意味で『物質と記憶』においては、感性的なものが自ずと精神的なものとなるのであると<sup>1)</sup>。

では、尖端としての習慣的記憶と、基底としての純粹記憶との間で、記憶はどのように収縮し、また拡張すると言われるか。まず、最も豊富な内容を持つ場合について、記憶は次のように記述される。

諸々の人格的記憶は、精確に位置づけられ、系列をなして、過去の経験を描き出すものであるが、これらが統一されれば、われわれの記憶力の、最終的かつ最も大きな外被を構成する。これらの記憶力は本質的に移ろいやすく、偶々精確なわれわれの身体

的態度がこれらを引き寄せるにせよ、身体的態度の不確定そのものが、これらの記憶が気紛れに発現する自由の余地を残すにせよ、偶然にしか物質化することはない(251/116)。

なぜ、物質化が偶然に委ねられることになるのか。それは次のことによる。つまり、この「記憶力の最も大きな外被」において、「ある意味では、そこに属する記憶は全て、現在の知覚と異なっている。というのは、これらの記憶をその多数の詳細とともに取り上げれば、二つの記憶は決して、同一なものとしての同じ事物である、ということがないからである」(306/186-187)。それゆえ、どれも現在の知覚と似ていないといえれば似ていない。にもかかわらず、というよりも、そうであるからこそ、「これらの知覚と、これらの記憶において、類似だけがあらわれるようにするために、詳細を無視する」(307/187)ならば、「どんな記憶でも現在の状況に近づけることができる」(306-307/187)とも言われる。個別のものの類別を許す一般性は、記憶のうちにはないのである。

この、現在の状態との連結不可能な在り方を、ベルクソンは「自身の生活を生きるかわりに夢みる人間存在」(295/172)の在り方であるとする。その対極には、活動する人間が置かれるのだが、これについては言うまでもあるまい。夢みるということは、J.イポリットの指摘するように、一切の活動(action)を離れて、ひたすら観照すること(contempler)に従事する、ということに他ならないであろう\*2。

反対に、多少なりとも収縮した記憶においては、詳細における差異は無際限ではなく、詳細を除いたときの類似も限定される。収縮するとはいかなることか。これをベルクソンは次のように記述する。

〔制限も減少もされない〕完全な(intégrale)記憶力は、現在の状態からの呼びかけに、二つの同時的な運動によって応える。ひとつは、平行移動(translation)の運動であり、これによって記憶力は、総体として、経験を迎えに行き、分割されないまま(sans se diviser)、活動のために、自身を多少なりとも収縮するのである(307-308/188)。

全面的に、分割されないまま収縮するという、この「平行移動」、つまり記憶力の「縮約」があるとしても、闇雲に収縮するのでは、現在の状態とどのように類似するのか不明であろう。それゆえ、もう一つの運動が指摘される。

もうひとつは、自転(rotation)の運動であり、これによって記憶力は、その瞬間の状況へと自らの方向をとり、この状況へと、最も役立つ側面を提示するのである(308/188)。

平行移動と自転により、記憶は収縮し、現在の身体的態度が描き出す「運動的図式」と合致するのである。

【物質と記憶】についての、以上の検討により、習慣を通じて、生ける自己の持続が空間化されるという、『試論』が指摘した事情は、記憶力のどのような構造に由来するのか

を理解できると思われる。一方で、真の記憶たる純粹記憶そのものは、その本性からして内的な綜合であり、持続である。したがって、純粹持続を細分化することは原則として出来ない。他方で、身体の習慣は、要素的運動装置の複合体であり、この運動装置を並べ変え、身体活動をより自由にするとともに、さまざまな習慣獲得の意義があると『物質と記憶』は見ている。習慣はまた、記憶としては、身体に存する「瞬間的」な記憶であるとも見られており、瞬間的・身体的な記憶としての習慣は、純粹記憶を基底とし、物質世界へと「現勢化」してゆく全体としての記憶にとって、「尖端」の役割を果たすと言われる。尖端としての習慣的記憶、あるいは運動的図式の、分解と再構成を許す性格が、この習慣的記憶を基底において支える純粹記憶の理解を誤らせるということ、このことが、記憶が持続についての理解を誤らせるという『試論』の指摘の示すことであろう。『物質と記憶』は、この自動的・反復的な自己の、根源的統一性としての自己についての認識としての、障害となる側面を、「運動的図式」が分解と再構成を許すという点に見出すと思われる。

では『物質と記憶』において、自己とは何であるか。ベルクソンは、記憶に見られる、物質世界へ差し込まれた尖端という相と、物質から独立した基底という相との間の往來の「堅実さ(solidité)」に、「『よく均衡のとれた』精神(les esprits bien équilibrés)」(294/170)、言い換えると、「良識(le bon sens)あるいは実践的なセンス(sens pratique)」を見出せるのだと述べている。結局のところ、堅実さの程度はどうあれ、記憶の尖端と基底との間の、この往來そのものが一般に、「われわれの心理生活(notre vie psychologique)」(306/185)であり、「正常な自己(le moi normal)」(302/181)であると言われる。J. イポリットのように、現在の身体に限局された自己が、純粹記憶という無差別に蓄積される過去のうちに引きこもる自己に向けて、現在の自己たることを止め、また逆に、純粹記憶としての自己が、現在の自己の要請に応じて、過去の自己たることを止めるという、「二重の方向性の間に、常に具体的な自己が位置する」と見るのは正しいと思われる<sup>3)</sup>。自己を理解するということは、二重の方向性の途上に成立する、さまざまの「均衡」を見極めることに他なるまい。それゆえ、現在にのみ縛りつけられている、習慣的記憶としての自己の、分解と再構成が可能であるという特徴を、習慣的記憶から純粹記憶へと到る往來そのものとしての自己に帰属させることは、自己についての理解の誤りなのである。

### 九、等質的な「活動の図式」と「運動的図式」

この誤りを助長するかに見えるのが、「等質的空間」および、「等質的時間」の存在であろう。助長する、というだけではあるまい。われわれの見るところでは、『物質と記憶』において、等質的空間と等質的時間が知覚へと導入されるのは、まさに「運動的図式」の確立を目指して、われわれが、「習慣」によって身体を、特に神経系の配列を、調整するからに他なるまい。『物質と記憶』第2章が、「運動的図式」について詳述したところを参照すると、「運動的図式」は習慣獲得過程の最初から現れていると、ベルクソンが考えていることが分かる。習慣がすっかり定着すれば、「単純化された形態」(255/121)となるであろうが、「運動的図式」は獲得過程全般に常に現前し、それが「次第にはっきりした姿を現す(se dégager)」(Ibid.)のは、「反復されるにつれて(en se répétant)」(Ibid.)である

一一二

と『物質と記憶』は述べている。

「運動的図式」にはっきりした姿をとらせることは、「運動を身体に理解させる」というふう言い換えられている。「運動を理解するには、これを他の運動から区別するに十分な本質的なところを実現すれば足りる。だが運動を実際にやれるとなると、さらにこの運動を、おのが身体に理解させ (faire comprendre) ておかねばならない」(257/123)。身体が運動を理解するということが、身体には「知性」の萌芽、あるいは、萌芽的な知性が見出されているということである。既に予感されていたことではあるが、「身体の知性」があればこそ、習慣は反復によって身につくと、『物質と記憶』ははっきり述べる。

いみじくも言われるように、習慣は努力の反復によって獲得される。だが、おなじことを再生産するばかりでは、努力を繰り返しても何の役に立とう。反復の本当の効果は、先ず分解し、次いで再構成するということであり、このようにして身体の知性 (l'intelligence du corps) へ語りかけることなのである (226/122)。

「身体の知性」と言われるからには、分解、再構成の代わりに、次のような語彙が用いられるのも理解できる。

ここでは完全な分析 (analyse complète) が必要となるのであって、この分析はどの細部を無視することもならないのである。また現勢的な総合 (synthèse actuelle) が必要となるのであって、この総合においては何を省略することもないのである (257/123-124)。

完全な分析に基づく、「現勢的な」総合の結果が、完成した身体運動としての習慣であろう。

では、習慣獲得途上に現れ、習慣の獲得を促す「運動的図式」についてはどのように言われるか。

イメージを模倣する錯然とした運動は、イメージの潜勢的な分解 (décomposition virtuelle) なのである。つまりこの運動は自身のうちに、分析の手がかり (à quoi s'analyser) を担っているのである (256/122)。

二 つまり、習慣の獲得とは、反復する度ごとに、「潜勢的な分解」としての運動的図式を手  
一 がかりとして、この潜勢的分解を、身体における、完全な、つまり現勢的な分解へと導き、次いで、身体によって現勢的な総合を行うことによって、行われるということであろう。

ここから、『試論』に論じられた等質的空間が、運動的図式に伴う「分解」となにかしらの関係の下にあるのではないかと推測できる\*4。この点で示唆的なのは、『物質と記憶』の第4章である。ペルクソンはここで、われわれが知覚において、欲求に従って延長を分割してゆく、ということ、そしてこのことが「任意に」行いうるということが納得されていなければならない、ということのうちに、等質的空間の介入を見出す。

ある意味で、多数の対象が存在するという、ある人は別の人から、ある樹木は別の樹木から、ある石は別の石から、区別されるということ、このことには異論の余地がない。というのも、それぞれの存在、それぞれの事物は、特徴的な特性を備えていて、一定の進化の法則に従うからである。だが、事物とその周辺との分離は、絶対的に截然としたものではない。感知できない段階を経て、一方から他方への推移が行われる。物質的宇宙のあらゆる対象を結びつける緊密な連帯、対象相互の作用と反作用の恒久性は、われわれがこれらの対象に属するとみなす精確な限界を持たない。われわれの知覚が、いわばこれらの対象の残滓の形を描くのである。われわれの知覚は、諸対象へのわれわれの可能的な活動が停止し、したがって、これらの対象がわれわれの関心を惹くことを止めるところを、諸対象の境界とするのである。こうしたことが、知覚する精神の、最初の、そして最もあからさまな働きなのである。この精神は、延長（étendue）の連続の中で、区分を辿るのであり、そうすることで、必要（besoin）からの示唆と、実践的生の必然性に従っているのである。しかし、このようにして実在を分割するためには、われわれはまず、実在が任意に分割できると納得していなくてはならない。われわれはしたがって、感性的質の連続性としての具体的延長の下に、限りなく変形可能で縮小可能な網目を持った網を張り渡す。単に考えられるに過ぎないこの土台（substrat）、このまったく理念的な、任意で無限な分割の図式（schème）が、等質空間である（344/235）

われわれは『試論』において、空間がカント的な意味での「図式」として把握されているのを見た。しかし、語彙として、『試論』は空間を「図式」と呼ぶことはなかった。『物質と記憶』の第4章に到って、初めて空間は、「図式」と呼ばれる。『物質と記憶』は、必要と、実践的生の必然性が、知覚において与えられる延長の区分をもたらしと見るのである。おそらく、原初的な生物では、「実在が任意に分割できること」を「納得する」までもあるまい。この場合、刺激に対する反作用は、限定されていると『物質と記憶』は見ている。神経系の適度な発展、つまりは活動における選択肢の多数性のみられる存在にとってのみ、実在を「任意に」分割することが問われるはずである。『物質と記憶』は等質的空間、および等質的時間について、次のように述べている。「等質的空間、等質的時間は従って、事物の特性でもなければ、われわれの認識能力の本質的な条件でもない。これらは、抽象的な形式の下で、固定と分割という二重の作業を表現したものである。この二重の作業を、われわれは実在の動的な連続に及ぼすことにより、そこに足場を確保し、操作の中心を定め、結局、そこへ真の変化を導入するのである」（345/237）。それゆえ、等質空間は「物質に対するわれわれの活動の図式」（Ibid.）であると言われるのである。

こうして、『試論』においては社会的な生のためにあると言われた空間が、『物質と記憶』においては、生の必然性一般のため、つまり、心理学講義ならば「相対的な」と言うであろう自由のためにある、ということが確認できたことと思う。最後に見たように、空間は、物質に働きかけ、そこに「変化を導入する」、つまり不確定性をもたらすために、より多様な活動のための足場として、置かれるのである。バルテルミー—マドールは、カントの超越論的認識、あるいは『創造的進化』の表現によれば「形式的な神（un Dieu formel）」

(797/356) の、さらにメタ・レベルに、ベルクソンは「工作人 (*homo faber*)」を置くと言っているが、この批判的な営みの一端が、この『物質と記憶』においては、このような形で等質的空間を「活動の図式」とすることによって、果たされると言ってもよいであろう\*5。

ところで、「実在が任意に分割できると納得してはならない」存在者とは、自身の活動、自身の身体へと働きかけ、習慣を獲得し、このことによって知覚を作り変えることのできる存在者ではないかと、われわれは考える。さらに言えば、習慣獲得の過程で、いくつもの「潜勢的分解」を行うことのできる者にとってのみ、「実在が任意に分割できる」ことについての納得が必要なのではないか。『物質と記憶』のベルクソンは、なるほどこのことを明示はしないが、われわれは以上の検討によって、運動的図式における「潜勢性」を、さらに図式として示したのもこそ、「等質的空間」ではないかと考えるのである。等質空間とは、「感性的質の連続性としての具体的延長の下に」張り渡される、「限りなく変形可能で縮小可能な網目を持った網」、あるいは、思惟されるにすぎない理念としての「任意で無限な分割の図式」であるとベルクソンは述べていたが、空間が先ずいで、カント批判を通じて「図式」として把握されたからこそ、習慣獲得過程において現れる、運動の「潜勢的分解」が、ここでも「図式」の名で呼ばれるのではないかと、われわれは考える。

このことは、「等質的時間」について述べる箇所に、一層明らかではないかと思われる。ベルクソンは、物質の必然性の只中であって、自由な活動が可能であるのは、「自身の生成がそこへと適用されるところの〔物質における；筆者補足〕生成に、次第に間を空けて目を向け、相手となる生成の判明な諸瞬間を固定し、このことによって物質を凝縮し、また物質を同化しつつ、物質を消化して、自然的な必然性の網目を通り抜ける反作用の運動を作り上げる存在」(345/236)、つまり、不確定な運動をもたらすべき身体を授けられた生物にとってであると述べている。こうした、自由の可能性を孕む存在としての生物は、瞬間を固定することにより、感性的な質の差を知覚するのである。〔「前略」感性的な諸々の質は、実在するものの固定によって得られた継起的瞬間である〕(Ibid.)。ところで、「継起一般の抽象的図式 (*schéme abstrait*)」(Ibid.)、つまり「等質的時間」を、「どうしても想像し (*imaginer*) なくてはならない」のは何のためかということ、ベルクソンは、「これらの瞬間を区別し、われわれ自身の現実存在と、事物の現実存在とに共通する糸で、これらの瞬間を結び合わせるため」(Ibid.) であると述べるのである。遑つて考えれば、瞬間を固定することは、「反作用の運動を作り上げること」に他ならない。とすれば、瞬間をさらに区別するということは、反作用の運動を改変するというでなくてはなるまい。

実際、われわれの現実存在と物質の現実存在とに「共通する糸」によって、区別された瞬間を繋ぐことを、『物質と記憶』の第1章は、「感官の教育」、つまり、「感官によって『物質的対象の全体を近似的に再構成すること』(197/48) と呼んでいる。そして、『物質と記憶』第2章には、「感官の教育は、まさに、感覚印象と、それをを用いる運動との間に設けられる、連結のうちに全ての本質を持つ」(240/102) と述べられている。感覚と運動との連結を組みなおすことこそ習慣の獲得である。とすれば、「継起の抽象的図式」を、「想像すること」が必要になるのは、習慣を獲得する存在にとってであると見てもよいのではないか。

『物質と記憶』は、等質的空間と等質的時間の、どちらがどちらに先行する、とも述べ

ない。そこが、認識の条件をつきつめようとした『試論』とは異なるのである。『試論』は心理的事象の認識にとって、「時間」などという固有の「図式」は不要であり、これは本来、心理的事象に適用できない「空間」を、不当に拡張利用したものに過ぎないと断じた。他方、『物質と記憶』は、『試論』において捉えられた「空間」を、その発生において捉えようとしている。この角度から見ると、『物質と記憶』では、等質的空間と等質的時間を作り出すことが、ともに、習慣獲得という仕方で、身体を調整し、生得的な知覚を刷新する存在、つまり生きて活動する人間に託されるのである。この立場にとって、等質的空間も等質的時間は、まさに「活動の図式」である。とすれば、これらを無制限に純粹認識の場に持ち込むのは誤りであることになるであろう。『物質と記憶』にしたがえば、この制限を設けるためには、知覚と意識の、実践的な性格に着目せねばならない、ということになるであろう。それゆえ、観照ないし思弁へ、活動の及ぼす影響を見極めることを、『物質と記憶』におけるベルクソンは、認識の理論のための要諦とする。

だが、試みるべき最後の企図があるであろう。それは、経験をその源泉まで、というよりも、あの決定的な転回点の上へと探りに行くことである。この転回点において、経験はわれわれの有用性へ向けて屈折し、固有に人間の経験となるのである（321/205）。

この「転回点」において、ベルクソンは「直接的なものから有用なものへの道りを照射する」（321/206）と述べるのである。

以上から、われわれは、次のように考えてもよいと思われる。つまり、等質的時間を、どうしても「想像し」なくてはならないという論述から推測できるように、ベルクソンは、超越論的な「図式」の産出を担うカントの構想力（*imagination*）が、習慣獲得の過程を直接の出所とする、実践的な性格の能力であることを、示そうとしていると考えることができるのではないか。ベルクソンは『物質と記憶』第4章「延長と拡がり」において次のように言う。実際に与えられているのは、物質における現勢的な運動であり、従って、空間の上に運動があるのではなく、実在としての運動が、空間を自身の下に残してゆくのである。彼はこの点を確認した上で、次のように続けるのである。

しかしわれわれの構想力（*imagination*）\*<sup>6</sup>は、何よりも表現のための便宜と、物質的な生からの要請とに忙殺されており、項〔運動と空間〕の自然な順序を転倒させることを好む。構想力は、自身の足場（*point d'appui*）を、すっかり構築の済んだ、不動のイメージからなる世界のうちに探すことを習慣としており（*habituée*）、これの世界の見かけの固定性は、とりわけ、われわれの低次の欲求の不変性を反映しているため、構想力はどうしても、休止が運動性に先立つと信じてしまうし、休止を目安にしてこの世界に落ち着こうとするし、結局は、運動のうちには、もはや距離、つまり運動に先立つ空間の、変動しか見ないのである（351/244）。

ベルクソンの見るところでは、構想力は「便宜」と「生からの要請」に忙殺されているのである。つまりは、構想力は本性からして実践的なものだ、とベルクソンは見ている。

また、ベルクソンは、「構想力」が、不動性のうちに「足場」を求めることを「習慣とする」と述べるのである。『物質と記憶』第2章を通じてわれわれが検討してきたことからすれば、「足場を求める習慣」、という表現は、どこか自己言及的である。習慣獲得とは、純粹記憶と身体の間を往來する自己が、新たな「足場」を固めることに他ならないはずだからである。とすれば、構想力にとっての、無限に分割できる図式を作り出すという習慣は、習慣獲得そのものを幾つも反復し、「運動的図式」を幾つも相手にしつつ、二次的に身につく習慣であるとは言えないであろうか。この箇所からもわれわれは、『物質と記憶』における等質的な空間・時間とは、「運動的図式」を自在に作るための図式だと推測したくなるのである\*7。

#### 十、結語—「力動的図式」と「製作」

『物質と記憶』に足りないと思われるもの、それは習慣の獲得を指導する精神的な働きがいかなるものか、という点についての見解である。先に見たとおり、「運動的図式」の成立に立会い、これを身体活動の場面ごとに感受するのは、意識であると言われたい。勿論、努力はあると言われていた。それが、反復と分析と総合の努力であることも指摘される。しかし、意識はどのように努力を統御するか、この点については、『物質と記憶』は殆ど語らない。

ベルクソンを離れて考えてみても、既存の様々な習慣の図式は、その分解が潜勢的あるゆえに、現勢化してまさに身体そのものとしてある身体活動よりは柔軟であろうから、新たに獲得されるべき習慣の図式にとって、素材という仕方で役立つであろうと思われる。他方、既存の図式は、やはりそのまま新たな図式となるわけにはゆかないので、新たな図式は、これら既存の図式との拮抗において、漸進的に獲得される他あるまい。ここには、ベルクソンの意味での注意力が介入しないだろうか。例えば、今度は現在の身体の態度ではなく、獲得されるべき模範としての身体の態度が、記憶となった既存の多数の身体的態度を統一するための核とはならないであろうか。

このことは、『精神のエネルギー』に収録される、1901年発表の「知性的努力」において論じられることになる。ベルクソンはダンスの習得を、既得の運動、例えば歩行の運動などを用い、これらの運動を、ダンスについての「次第に抽象的になる (de plus en plus abstraite) 表象」(951/179) に向けて「屈折させる (infléchir)」(951/180) ことにより、これらの運動を「新たな方法で組み合わせる」(Ibid.) ことであると規定している。

習得すべき運動を「抽象的に表すようになる表象」が、ここでは「図式」と呼ばれるが、しかしこの図式はもはや「運動的図式 (schème moteur)」ではない。用語を変えて、この図式は「力動的図式 (schéma dynamique)」と呼ばれるのである。この用語法には、おそらくカントへの対立意識よりも、心理学領域への配慮があると思われる。しかし今見たように「力動的図式」が理解されているとすれば、それは「運動的図式」の成立そのものに関わる、一つの指導的な理念であって、『試論』からカント講読を経て『物質と記憶』へと結実したカント批判の、延長線上に置かれるものであると考えられる。実際、ベルクソンは、「力動的図式」を「全ての観念、全てのイメージ、全ての語を、ただ一点に集中させる能力」(936/161) と規定しつつ、恐らくは等質的な空間・時間という「活動の図式」との

対比において、「この表象は、おのおののイメージを貧しくすることによって得られるような、イメージからの抽出物 (extrait) ではない」(937/161) し、「イメージ総体が意味するものの抽象的表象」(Ibid.) にとどまるものでもない述べるのである。

「知性的努力」において、「力動的図式」は、習慣の獲得のみならず、知解から再認、発明まで説明する、射程の広い知見である。この知見の向かうところだけは確認しておこう。「〔図式が成就される形態へとイメージを推進し、牽引する〕働きは、生命の働きそのものであり、これは、より現実化されていないものから、より現実化されているものへ、内包的なものから外延的なものへ、部分相互の含意から、部分の並列へと向かう。これが知性的努力というものである」(959/190)。G. ドゥルーズは\*<sup>9</sup>、『物質と記憶』にもこうした因子が、特に純粋記憶のうちに隠れていると指摘している。たしかに、例えば『物質と記憶』が失語症事例の中で上げる固有名 (2654-265/132-134)、つまり個別性の極限にあり、むしろ単独性と言ってもよいものについては、『物質と記憶』が説明するように、必ずしも身体的態度がこれを再認させるとばかりも思われぬ。他方で、『物質と記憶』は、再認には一挙に過去へと身を置くことが必要だと述べていた (cf.261/129)。とはいえ、固有名について『物質と記憶』よりも簡潔に説明しつつ (952/181)、記憶そのものの統一の働きを明示したのは、やはり1901年の「知性的努力」であると言わねばならない。

この意味で、1901年の「知性的努力」は、『創造的進化』に展開される生命の哲学の、まぎれもない発端である。ところで、われわれは、潜勢的なものから現勢的なものへと向かう「力動的図式」の働きの先で説明される生命の躍動について語ることなしに、ベルクソンが等質的な「活動の図式」を、どのように概念的思惟へと関連させるかを語ることはできない。『創造的進化』が、空間と知性を繋ぐのは、知性本来の働く場とであるとされる道具の「製作 (fabrication)」においてである (625/155)。製作において、なぜ空間が必要となるか。われわれはほんの概略だけ述べることにしたい。

ベルクソンは生命の「統一性」の運動に、物質の「拡散」を対置し、物質の向かう極限值として、空間を、いわば実在化して、導入する (680/219)。生命と物質との拮抗から説明される生物の生存能力 (703/246)、とりわけ人間における知性は、物質が空間へ向かう運動を取り込むことによって、この運動を克服しようとする営みであると言われる。それは勿論、生存の為であり、製作は知性のこの傾向を担う活動なのである\*<sup>9</sup>。このように、『物質と記憶』が構想力に担わせる等質的環境の導入は、『創造的進化』においては「技術」の根底にある「製作」に組み込まれていることである。知性的な存在者にとって、技術的な存在者、「工作人 (*Homo faber*)」(613/140) であることは、概念的な思惟の担い手であることに先立つ。ここからさらに、製作と習慣ではいずれが先行するとベルクソンが述べるかについて、いまわれわれに論ずるゆとりはない\*<sup>10</sup>。ただ、少なくとも、製作が、知性と空間とを結ぶ要であることを、われわれは指摘しておきたい。

最後にわれわれは、次のことを確認しておこう。つまり、『物質と記憶』において、知性的な態度によって行われる自己認識が破綻するのは、知性的な態度そのもののうちに、自身の実践的な起源への無理解があるからだ、ということ、ベルクソンは指摘するのである。つまり、知性とは起源からすれば生きるために必要なものであるということ、及び、等質的時間・空間は、同じく生きて活動するために導入されるということについて、知性には理解できないということである。特に、進展よりも事物を捉え、出来つつあるも

のではなく出来合いのものを捉えるのは、知性が習慣を根とし、習慣が固定と分解によって獲得されるからであり、この点を理解するには、習慣の獲得を説明せねばならず、そのためには進展や出来つつあるものをそれとして捉えねばならない、というのがベルクソンの見解であろう。

このような見解は、ベルクソンが『物質と記憶』において、習慣というものの獲得から、獲得された後に、習慣が人間精神にとって果たす役割まで、緻密に考察していることに基づいて、得られたものである。その上で、ベルクソンは哲学的探求にとって、「ある思惟の習慣、またある知覚の習慣すら、廃棄するということ」(321/204)が必要だと述べているのである。以上を確認して、われわれは本論文における検討と考察を終えたい。

#### 凡例

ベルクソン・テキストを引用する場合、つぎのような記号を用いた。

- 1) 著作については *Œuvres*, PUF, 1959. を底本としたが、同時に *Quadrige* 版におけるページ番号も記した。引用後の丸括弧内の数字のうち、/の前が前者のページ数、後が後者のページ数である。
- 2) 講義集は、*Bergson, Cours II*, PUF, 1992, éd. par H. Hude. および *Bergson, Cours III*, PUF, 1995, éd. par H. Hude. を用いた。ページ数は、前者については CII、後者については CIII を用いて示した。

※本稿は、平成15年度筑波大学学内プロジェクト研究助成費(奨励研究)による研究成果の一部である。

#### 注

- \*1 Theau, Jean, *La critique bergsonienne du concept*, PUF, 1968, p. 324.
- \*2 Hyppolite, Jean, *Aspects divers de la Mémoire chez Bergson*, dans *Figures de la pensée philosophique*, PUF, 1971, t.I, pp.479-480.
- \*3 Hyppolite, Jean, *Aspects divers de la Mémoire chez Bergson*, dans *Figures de la pensée philosophique*, PUF, 1971, t.I, p.478.
- \*4 この問題についての解釈の仕方として、「行動の図式」、あるいは「固定と分割の原理」としての等質的空間および等質的時間の発生を、『物質と記憶』第二章に提示される「運動的図式」と結びつける点で、石井敏夫氏の論文は優れていると思われる。われわれの把握は、石井氏と大きくは変わらないのであるが、異なる提示の仕方をしてみたい。石井敏夫、『ベルクソンにおける記憶力理論—『物質と記憶』における精神と物質の存在証明—』、理想社、2001年、50~56頁。
- \*5 Barthélemy-Madaule, Madeleine, *Bergson adversaire de Kant*, PUF, 1966. p.85.
- \*6 ここで論及される *imagination* をこの能力に託される「空間」との密接な関係からして、カント的な意味での「構想力」と訳出してよいであろう。何よりも、『物質と記憶』第4章におけるこの箇所は、知覚される具体的延長と、空間との関係を述べる箇所である。期待される通り、カントへの言及が、*Œuvres* で言えばこの箇所の5頁前に見出せる。「われわれは、カントと共に、空間と時間がわれわれの感性の形式であれかしと望むか」(346/237)。
- \*7 G. ドゥルーズにならって、ベルクソンにおける可能性 (*possibilité*) を、潜勢性 (*virtualité*) と区別しておくべきであろう。身体にとって現実は何ができるかは、身体の潜勢性に属すると見よう。身体の潜勢的活動は、実在し、現実的である (*réel*)。これは、『試論』の意味で現勢的に (*actuel*) なる前の、実現の過程そのものという意味で、潜勢的なのである。他方、実現の過程を顧慮せず、単に実現に先立つものについて述べたものを、可能性に属すると考えたい。これは、実現を射程に入れない以上、現実的・実在的なものも、そうでないものも含む。のみならず、実現の過程が無視されるため、

可能的なものとは、実質的には現勢的なものに他ならず、この現勢的なものが単に実現に先立つと想定されているに過ぎないと考えてよいであろう。実際、『試論』は空間を、あらゆる分割が可能という意味で、現勢的と呼んだのであった。cf. Deleuze, Gilles, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, pp.99-101.

\* 8 Deleuze, Gilles, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, p.53.

\* 9 拙論、「ベルクソンにおける労働とその価値」、日本哲学会編『哲学』、第50号、1999年、237頁～239頁を参照。また、ベルクソンの哲学を、技術論として考察する論文としては、cf. Séris, Jean-Pierre, *Bergson et la technique*, dans *Bergson: naissance d'une philosophie*, PUF, 1989, pp.121-138. また、ベルクソンが、果たして技術的思惟についての確に把握しているかどうか、これはまた改めて検討すべき問題となろう。例えば、G. シモンドンは、ベルクソンの技術的思惟への理解は、観照と実践を対比し、観照を優位に、実践を劣位に置くという、古代的な構図のうちに留まっているとする。cf. Simondon, Gilbert, *Du mode d'existence des objets techniques*, Aubin, 1958, 1969 et 1989, pp.234-237.

\*10 「創造的進化」において、製作によって身についた習慣は、まずは物質的対象の明瞭な概念を生む。次いで、心的対象についての概念に先立ち、言語を生むのである（628-629/158-158）。心的活動についての概念は、言語によって生ずると、『創造的進化』は明らかに述べている（629/150-160）。この見解を、『物質と記憶』によって補足することができる。『物質と記憶』によれば、そもそも知覚は記号であり、再認を通じて記憶によって解釈されるのである。この知覚を、身体が支えるのである。身体の活動が不動であれば、記号は固定的となる。これが『創造的進化』において、「本能の記号は固着した記号である」（629/158）と言われることの意味であろう。他方、身体の活動が可変的であれば、記号は自在となる。講義においては、欲求と密着した運動、「自然が溶接しておいた運動」を、欲求から切り離し、利益を離れて自分自身の振る舞いを振る舞う「俳優となる」ことが、観念的言語の始まりであると言われている（C II 384）。

## Le schème et l'unité originelle dans la philosophie de Bergson (3)

Takuya NAGANO

Nous examinons ici *Matière et Mémoire* en nous interrogeant comment Bergson explique la signification de l'habitude au milieu de l'activité du moi vivant et libre et comment il traite la relation entre l'espace comme schème et l'habitude qui sert au moi de moyen de décomposition de sa propre activité.

Dans les 2<sup>e</sup> et 3<sup>e</sup> Chapitres de *Matière et Mémoire*, Bergson fait la distinction entre deux types de mémoire : d'une part, la mémoire est dite corporelle et considérée comme une sorte d'habitude contractée; d'autre part, envisagée à son état pur, la mémoire est en quelque sorte coextensive à l'esprit, comme sa virtualité. Elle conserve tout ce qu'on a perçu en en constituant un ensemble organique indivisible à la manière de la durée; cet ensemble, souvenir pur, est toujours présent quoique inaperçu et réapparaît dans des situations reconnaissables. Bergson rejoint ces deux sortes de mémoire dans le processus de la reconnaissance ; la mémoire-habitude constitue le moment de l'appel lancé du présent au passé en suggérant par sa réaction automatique une esquisse de ce qui s'ensuivrait à une situation donnée, et la mémoire pure y répond. Nous pouvons conclure de là que le moi au sens de *L'Essai* consisterait dans le va et vient entre ces deux mémoires, et que ce serait précisément parce que ce va et vient est nécessaire à la reconnaissance, voire à la vie, qu'il est difficile à éviter la confusion entre le moi dans son ensemble et sa surface automatique habituelle.

Concernant l'acquisition de l'habitude, Bergson remarque son caractère à la fois concret et intellectuel. Pour acquérir une habitude, dit-il, il faut l'analyse complète et la synthèse actuelle des mouvements auxquels on veut s'habituer. Cette analyse et cette synthèse sont censées être faites par le corps qui «comprend» l'habitude à acquérir. Bergson verrait dans ce processus de l'acquisition de l'habitude l'introduction de la divisibilité spatiale dans la durée du moi. En fait, au cours de ce processus, Bergson insère un intermédiaire pour la division, cette fois corporel et virtuel, qui suggère l'articulation possible des mouvements corporels; c'est le «schème moteur», un mouvement naissant de l'articulation qui s'organise autour de l'impression reçue. Cet intermédiaire ne serait pas d'emblé équivalent au schème de l'espace homogène car, même virtuelle, la division qu'il suggère ne serait pas indéfinie. Mais, d'autre part, Bergson considère l'espace comme le «schème de l'action», et affirme que c'est l'imagination qui fait la division spatiale et temporelle indéfinie. Cela nous invite à penser que le schème de la division indéfinie naîtrait de l'opération intégrante des schèmes moteurs, opération propre à l'imagination en acte. Voilà pour *Matière et Mémoire*.

Dans un article intitulé «L'effort intellectuel», un autre schème joue le rôle de modèle de synthèse pour toutes les activités créatrices et productrices, y compris l'acquisition de l'habitude : le «schème dynamique». Ce schème, constituant le foyer même du moi créateur et concentrant divers schèmes moteurs, nous donnerait la clef pour comprendre à la fois la place de l'homme dans l'évolution de la vie et la genèse du schème spacial infiniment divisible. Ce thème sera largement développé dans *L'évolution créatrice*.